

**米騒動**

「米騒動絵巻」 徳川美術館所蔵

**絵巻について**

この絵は、徳川美術館所蔵（名古屋市）の「米騒動絵巻」の一部である。作者は同館職員の桜井清香。当初の絵巻は戦災で焼失したため、現在の所蔵品は、稿本を元に戦後の1950（昭和25）年に再度清書されたものである。

名古屋市での米騒動は1918（大正7）年8月9日夜から始まったが、米穀取引所がある米屋町（現在の名古屋駅近く）を標的として騒動が本格化したのは10日夜からであった。同夜、鶴舞公園に集まった1万人をこえる群衆の一部が市中に流れ出たが、この日は市内要所を固めた警官隊に行く手を阻まれた。しかし、11日には5万人、12日には3万人にのぼる群衆が鶴舞公園から市中に繰り出し、警官隊と衝突しながら各地の米屋や交番などの破壊を行った。12日には県知事の要請で軍隊が出動して鎮圧に乗り出した。名古屋市の米騒動は17日まで続くが、13日以降は下火になった。

この絵は、米屋町の手前にある泥江橋<sup>ひじえぼし</sup>付近で警官・騎馬憲兵と民衆が衝突している様子を描いている。左側では棍棒を持ったゆかた姿の民衆が右へ進むようしているが、右手には白い夏服を着た警官が抜刀して対抗し、栗毛の馬に乗った憲兵が民衆を蹴散らそうとしている。それに押された民衆が逃げて（一部は江川に落ちている）、民衆が交差している場面もある。道路上に書かれた左右4本の直線は路面電車の線路。橋の近くにある青い建物は公衆便所である。泥江橋での攻防は11日が激しかったが、騎馬憲兵の登場は12日である。作者は、11～12日の攻防を一緒にして描いたのであろうか。

**米騒動の流れ**

この年の米騒動は、7月に富山県の漁村から始まった。中心となったのは北海道などに漁業出稼ぎに出ている漁民の妻たちで、家計を支えるため、倉庫から舁船<sup>はしふね</sup>まで米を運ぶ仕事をしている者が多かった。米の運び出し→県外への移出によって地域の米価が高騰し、

米商が自分たちに売り惜しみをする因果関係を身をもって知っていた。そこで、米の移出停止と安米の販売を米問屋・米商に求めたのである。彼女らの行動が激化し、「女房一揆」として全国に報道されたのは8月3日発生の西水橋町での騒動以降のことで、県下の米騒動は、翌日の東水橋町、翌々日の滑川町でピークを迎えた。

この動きが新聞で全国に伝わるなか、大都市では米価がさらに暴騰し、1升が50銭をこえ、米の売り惜しみも多くなった。ついに10日、京都市で米商に押し寄せ、1升30銭での売り出しを行わせ、米倉庫を襲撃する騒動が始まった。11日から名古屋市で、12日から神戸市・岡山市で、13～14日は大阪市や三重県下で大規模な米商襲撃の騒動があり、東京市でも13日から5日間、数万人による米騒動があった。「米騒動の広がり」の地図（教科書p.189）に示されているように、騒動は8月を中心に7月から10月まで全国的に発生した。名古屋市の米騒動は、全国的にみてもきわめて激しいものであった。

**米騒動の歴史的意義**

こうしたさなかの8月14日、政府は、米騒動の記事を新聞が報道することを禁止した。言論を封じるこのやり方を、新聞界だけでなく、政党も「非立憲的行為」として強く非難した。ここにおいて、米騒動は政局を動かす問題に発展し、ついに9月下旬、寺内正毅内閣が総辞職し、本格的政党内閣である政友会の原敬内閣が誕生した。

他方、大都市での米騒動の先駆けである10日の京都市の米騒動は被差別部落の人びとが中心となったもので、奈良県や三重県の米騒動でも部落の人びとが関係したケースが多い。警察は無関係の部落の人びとを検挙して罪をきせようとする傾向もあり、部落の人びとの怒りを募らせた。こうした米騒動の体験が、米騒動に直接参加しない人を含め、民衆の権利意識を高めさせ、全国水平社の結成（1922年）を含む部落解放運動の興起のきっかけとなった。また、神戸市の米騒動は労働者の賃上げ争議と連動したものがあつた。

全体として、米騒動は、生活問題を媒介として、政治問題・社会問題に立ち上がる正当性を民衆に与え、世界的なデモクラシーの風潮とあいまって第一次世界大戦後の「社会運動の時代」に道を拓くものとなった。

（共立女子大学教授 阿部恒久）